

産業動物獣医療の将来性を考える

中尾敏彦[†] (山口大学農学部獣医学科長・日本産業動物獣医学会副会長)



1 はじめに

産業動物臨床獣医師の不足がわが国獣医界にとって重要な問題になっている。確かに、獣医学生の中で、将来、産業動物臨床の分野に進もうという者は少ない。同様の問題を、欧米諸国も抱えている。数年前の

世界牛病学会で獣医学教育専門化のテーマでシンポジウムが開かれた時に、「ある学年から、例えば、牛、馬、小動物などの動物種別のコースを設ければ、より専門的な教育を行うことが可能になり、獣医師のレベルアップにもつながるが、問題は、そのようなコースを設けると、牛のコースを専攻する学生が殆どいなくなるのだ。」という、厳しい現実が、ドイツの教授から紹介された。また、産業動物獣医師の不足が極めて深刻な米国では、学生に、産業動物臨床を体験させることにより、興味を持たせ、産業動物臨床への方向付けをしようとする試みが行われているが、効果があまりあがらず、むしろ、その現実に失望する学生が少なくないという。

このように、将来のある獣医学生が産業動物臨床を敬遠する傾向があることは、産業動物関係者にとって由々しき問題であり、早急な対応が求められるが、解決には長期的な戦略が必要と思われる。

そこで、まず、産業動物臨床に進もうという学生が少ないのはなぜかということを考えてみたい。もともと産業動物となじみのない環境で育ってきた学生が多いことや、臨床現場における業務の内容と質、業務環境、待遇などが満足でないことも理由としてあげられるが、最も大きな理由は、学生達が産業動物臨床の将来に明らかな可能性を見出せないからではないだろうか。現実には、乳牛の飼養戸数は急激に減少し、飼養頭数も減少している。厳しい受験戦争を勝ち抜いてきて、これから6年間獣医学を学ぼうとする若者達が、将来性の明らかでない分野に進むことを敬遠するのは当然といえば当然であろう。

したがって、今、産業動物臨床の関係者に求められて

いるのは、若者に対して、産業動物臨床の将来性について自信を持って語り、可能性を指し示すことではないかと思う。そこで、ここでは、筆者が、普段、低学年の学生達や、これから獣医系大学への進学を目ざす若者達に語っている、産業動物臨床の意義、将来性および可能性などについて述べ、さらに、可能性を実現するための課題について言及してみたい。

2 産業動物獣医療の意義と獣医師の役割

酪農を例にとってみると、乳牛飼養戸数は著しく減少しているが、乳牛の頭数そのものの減少はやや緩慢であり、その結果、一戸あたりの頭数が増加している。そうした中で、意欲的で、優れた技術と知識を身につけた先進的な酪農家が増えてきている。そして、社会的には、輸入食品への過度の依存への反省から、食糧自給率の向上と、安心して安全な食糧の効率的生産の必要性が認められてきている。

こうした中で、産業動物獣医療に求められることは、動物の健康を増進し、繁殖性を高めて、安全な食糧を効率よく生産し、生産者の経営を安定化させることである。したがって、獣医師にも、動物の病気を診てくれる先生としての役割の他に、生産者のよきパートナーとして、いっしょに、動物の健康増進と生産性向上に取り組む姿勢が求められる。そして、もう一つ産業動物獣医師に求められているのは、知識と技術と意識の国際化である。「芸術と科学の進歩に国境はない。」と言うゲーテの言葉を借りるまでもなく、世界各国で進歩している専門の技術や知識を、わが国の獣医師もしっかりと共有し、最も優れた獣医療を提供することが求められている。

したがって、新しい産業動物獣医師像のキーワードは、「動物の健康増進と安全で効率的な食糧生産の実践力」と「国際性」ということになりそうである。

3 産業動物臨床の将来性

(1) 生産者と協力して、動物の健康の増進と生産性向上を図ることができる獣医師のニーズは今後ますます増大し、活躍の場が広がる可能性が高い。獣医師のリーダーシップによって生産性が向上し、生産者の経営が安定

[†] 連絡責任者：中尾敏彦 (山口大学農学部獣医学科獣医臨床繁殖学教室)

〒753-8515 山口市吉田1677-1 ☎083-933-5800 FAX 083-933-5820 E-mail : tnakao@yamaguchi-u.ac.jp

すれば、食生産の担い手の育成と食糧生産基盤の強化にもつながり、社会的貢献もより大きくなる。

(2) 動物を病気から守り、健康を増進するためには、専門性のある獣医師が必要となる。産業動物臨床においても、例えば、乳房衛生、繁殖管理、臨床栄養など、いくつかの分野に専門化する可能性があり、それによって、臨床レベルの向上が期待される。

(3) 日常の診療の中で、産業動物獣医学の発展に寄与できるようなテーマを設定し、研究を行うことにより、生産者に対してより高度なサービスを提供するとともに、獣医学の進歩にも貢献することが可能となる。そして、さらに学位を取得すれば、活動範囲はさらに広がる。

(4) 専門知識と技術の国際化により、より高度な獣医療を提供することが可能になる。国内で飼育されている牛の頭数は、平成18年の資料では、乳牛と肉牛を合わせて、441万頭であり、このうち、乳牛は166万頭で、徐々に減少している。しかし、世界的に見ると、牛の飼養頭数は13億5千万頭であり、さらに水牛が1億7千万頭で、いずれも、わずかに増加の傾向を示している。単純に計算すれば、世界では、日本で飼育されている牛の約340倍の牛と水牛が飼われていることになる。したがって、例えば、我々が牛の臨床における経験や知識に基づいて新しい技術を開発することができれば、その情報が世界中の獣医師に共有されることにより、牛と水牛を合わせた15億の動物への波及効果を生む可能性を持つことになる。したがって、世界の情報を入手するとともに、自らの経験で得られた情報を積極的に発信する努力を続けることによって、産業動物医療の最新の情報を世界中の獣医師とともに常に共有することができれば、産業動物臨床の著しい進歩が期待できる。

(5) 国際協力の必要性の増大

世界人口は、2008年に67億5千万で、この10年間で8億増加しているが、2050年の予測人口は91億9千万と、2008年よりも24億以上の増加となる。しかも、この増加分の大部分(22億)はアジアとアフリカである。

このような人口の増加は、当然、食料の不足を招く。最近発表されたFAOの報告書によれば、栄養不足の状態にある飢餓人口が、2009年中に10億2千万に達する見込みである。そして飢餓人口のうち、6億4千万がアジア・太平洋地域、そして、サハラ以南のアフリカが2億6千万となっている。計算上、地球上の8人に1人以上が飢餓状態ということになるが、アジア、アフリカ地域に限れば、この割合は、さらに高くなる。

言うまでもなく、飢餓人口の増加は、世界平和や安全保障への脅威となる。アジア、アフリカ地域における持続可能な食糧生産体制の確立が急務であるが、このためには、牛などの反芻動物を中心とした環境保全型の農業

の導入が必要であろう。しかし、これらの地域では、獣医師不足という問題もあり、産業動物獣医療の普及が遅れている。この分野での日本の貢献の可能性は高い。国際的な環境で仕事のできる獣医師にとっては、将来的な活躍の場が大きく広がることが予想される。

4 産業動物臨床の将来性を具体化するためには

産業動物臨床の将来を語ることは重要であるが、それをいかに実現するかを考えることも、それ以上に重要である。

(1) 現役の獣医師が描く産業動物臨床の将来像の提示
産業動物臨床の将来は決して画一的なものではない。立場や視点によって多様な将来像が浮かんでくるはずである。例えば、産業動物獣医療の専門化を進め、臨床栄養、代謝障害、乳房衛生、繁殖管理、呼吸器病、運動器病などの専門分野を明確にし、生産者が、必要に応じて、それぞれの専門家に往診を依頼するシステムをつくることも、将来の可能性としてあげられるかもしれない。あるいは、卒後教育により、外国語によるコミュニケーションスキルを磨き、活動の場と機会を、国内だけではなく国外にも広げることもあげられるであろう。大事なことは、現役の獣医師が産業動物臨床の将来をどのように考えているかを整理して、提示することである。

(2) 獣医学科入学前の段階での啓蒙活動

本学で、獣医学科に入学してくる学生に将来の進路希望を聞くと、小動物診療が圧倒的に多く、次に野生動物の管理と続くが、最近では、研究を目指すと言う学生も増えてきたように思われる。海外で国際協力などに活躍したいという者も少数あるが、産業動物臨床を希望するのは極めて少ない。どちらにしても、入学前にすでにかなり動機付けを受けているのは確かなようである。

広い範囲から優秀な人材を確保するためには、気の長い話ではあるが、高校生、中学生、できれば小学生あたりから、食糧生産における動物の役割と、その動物を病気から守り、健康を維持し、生産性を最大に発揮させる上での獣医師の役割について啓蒙を行うことが必要であろう。例えば、学校給食に出てくる牛乳がどのように生産され、その安全性がどのように守られているかを、獣医師が直接小学生に話して聞かせることも、有益ではないかと思われる。

(3) 獣医学生に対する教育のあり方

入学時に必ずしも産業動物を志向していなかった学生が、その後産業動物臨床を希望することが少なくないが、その動機付けになっているのは、牛や馬などの飼育を体験することではないかと感じている。牛や馬への愛情から、このような大動物を病気から守り、健康を守ることができる獣医師になりたいと思うようになるのは、自然の成り行きであろう。したがって、低学年次に、酪

農家や畜産農家あるいは企業経営の農場などで、動物飼育を体験させ、食糧生産を担う動物と農家の魅力を発見させ、それらを守り育てるものとしての獣医師の役割を認識させることが重要と思われる。

また、このような体験は、動物の健康と病気を飼い主の立場で考えることができる獣医師の育成にもつながり、生産者との信頼関係の構築にも有益である。

(4) 研究者としての可能性の追求

つい先日、本学でもオープンキャンパスが開催され、獣医学科にも300名近くの来訪者があった。その中で、外国の大学の水産系学部を卒業予定で、獣医学科入学を目指している学生から、「入学後は特に繁殖学に力を入れて学びたいと思っているが、卒業後診療現場に出た時に、繁殖学の専門性というのを活かすことができるのかどうか。」と言うような趣旨の質問を受けた。

「産業動物の臨床獣医師は、日常的に、専門分野別に診療を行っているわけではないので、繁殖を専門に担当することは難しいと思われるが、診療の中で、自分で研究テーマを持って、症例やデータを蓄積し、その成果を学会や雑誌に発表することはできるし、そのような獣医師は多い。このように診療の中でテーマを持って研究ができるのは、日本の獣医界の特徴で、欧米諸国では、そのような機会は極めて少ない。」と説明すると、目を輝かしていた。

産業動物臨床獣医師が、在職のまま研究を行い、蓄積された研究成果に基づいて、学位を取得することは、当然、その分野での学術的な貢献という点で評価されるべきであるが、それにも増して、獣医師の診療のレベルアップをもたらし、生産者にも大きな利益をもたらすことになる。

(5) 国際性の涵養

大学における産業動物臨床教育は、質量とも、欧米に比べて著しく劣っているのは事実であるが、現役の産業動物臨床獣医師のレベルは、欧米に比べて、決して遜色がない。これは、わが国の卒後教育が充実していることから来ている。日本の産業動物臨床の卒後教育については、農業共済組合（NOSAI）が大きな役割を果たしてきている。各地に家畜臨床研修所があって、新卒獣医師の臨床研修を始め、中堅獣医師向けの様々な研修を行い、研究発表会の開催や、国内外の学会への派遣など、外国には見られない、きめ細かなプログラムが提供され、効果をあげている。以前に、世界の牛の臨床をリードするドイツ・ハノーバー獣医科大学牛病クリニックの主任教授が北海道NOSAI研修所を訪れた際に、日本のNOSAI制度を見聞し、特に、卒後教育に果たしている

役割の大きさに感嘆するとともに、その制度のメリットを高く評価していた。このように、世界に冠たるNOSAI制度ではあるが、今求められている、産業動物臨床の国際化の推進を担うことは、制度的にも容易ではなさそうである。

国際化とは、ある意味で、国境をなくすという意味を持つ。外国の情報を得ることだけではなく、われわれの情報も対等に発信することが求められる。言い換えれば、産業動物臨床の進歩に関する国際的な情報を利用し、それを診療に活かすためには、利用する以上に、情報を提供し、その分野の進歩に貢献することが義務付けられることになる。そして、そのためには、一人一人が、基礎的なコミュニケーション能力を身につけることが必要となる。

そして、そのコミュニケーション能力を武器にして、国際学会などの場で臆することなく、情報提供を行い、情報交換を行う積極性を発揮することであろう。

獣医学学生にも、獣医療の国際化をチャンスととらえて、積極的にチャレンジできるような学力と語学力を養わせることが必要であろう。わが国の獣医学教育も、国際基準を見据えて、改善の方向性がようやく示されようとしている。大学や地域や教員の利益はさておき、前途ある学生が、国際的に通用する専門知識と基礎的な技術と人間性を身につけることができるような獣医学教育への改善を期待しているところである。

5 おわりに

産業動物獣医療における世界的な課題として、乳牛の繁殖成績の低下の問題がある。繁殖性の低下は、分娩間隔の延長による経済的損失だけでなく、周産期疾病の増加、生産性の低下および改良の遅れなど、酪農経営の根幹にかかわる深刻な問題である。当然、世界各国で、この問題への取り組みが行われ、解決の糸口が見つかりつつある部分もある。したがって、この問題の解決には、わが国だけでなく、世界各国の専門家が研究成果を持ち寄り、情報を共有し、対策を協議することが必要と思われる。

今回、この世界的な問題を取り上げ、原因と具体的な対策を明らかにしようとする、国際シンポジウムが、日本の関係者のイニシアチブにより、来年1月30日と31日の両日、日本獣医師会学会年次大会（宮崎）において、開催されることになった。多くの産業動物獣医師の方々が出席され、乳牛の繁殖性低下の問題を解決する国際的な共同作業に参加されることを期待したい。